博士学位論文審査要旨

２００９年7月２５日

論 文 題 目：　共同性の探求―長谷川如是閑の政治思想―
学位申請者：　織田　健志
審 査 委 員：
　主　査：　法学研究科　　教授　出原　政雄
　副　査：　同志社大学　名誉教授　西田　毅
　副　査：　法学研究科　　教授　富沢　克

要　　旨：

本論文で取り上げる長谷川如是閑という人物は、しばしば「文明批評家」と評されるように幅広い問題関心を持ち多方面の分野で活躍したが、とくに大正・昭和期のジャーナリズムや論壇で圧倒的存在感を示していた著名な知識人である。そのわりにはこれまで如是閑研究はそれほど多くはなく、その評価も未だ定まったものがない。如是閑の書く論説は難解で、なかなか分析しにくい人物であることがその要因のひとつと思われるが、本論文はこうした理解困難な人物に果敢に取り組んだ長年の成果をまとめ、これまでの如是閑研究に一石を投じようとしたものである。その論点は多岐にわたるが、ここでは主要なものだけに限定して以下で簡潔に述べたい。

第一に、如是閑の思想的特徴について、彼の主著『現代国家批判』『現代社会批判』のタイトルに現わされているように、しばしば批判ばかりで何も生み出さないといわれたりするが、本論文ではこうした見解に対して、如是閑の思想の根底にある「生活事実」という独自の概念に注目し、「個」と共同性の再構成を模索した思想家として考察している。その際、第一次大戦後に鮮明となるいわゆる「社会の発見」という思想傾向に敏感に反応した如是閑の「社会」概念の中にその理論的到達点を見出すことができるとみなしている。それがこれまでほとんど注目されてこなかった「行動の体系としての社会」という社会理論であり、本論文の中心をなす第三章「共同性の探求―『社会』概念の形成を中心に」において詳細に検討された。つまり「行動」という概念に注目することによって「個」と集団の相関関係が明確となり、そして彼の認識枠組みであった社会有機体論の、「個」の実在を生かした有機体論的思考への読み替えが可能になったとして、新たな問題提起がなされている。

第二に、庶民の日常生活を意味する「生活事実」という概念を基礎にして、「国家」と「社会」の二元論を超えて、国家の存在理由を改めて問い直した「国家の社会化」という思考方法に着目して分析した点が注目される。それは、スペンサー流の社会進化論の受容とともに、「闘争本能」に基づく統治機構としての国家と「互助本能」に基づく生活共同体としての社会とを区別し、しかも社会の優位の下に人々の「生活事実」に依拠して国家を社会に従属させることで両者の調和を展望したところにその思想的特質があるとされる。こうした検討は主に第二章「『国家の社会化』とその思想史的意味―『現代国家批判』とその周辺」で取り扱われている。

第三に、しばしば登場する「生活事実」という概念は本論文を通底する如是閑の重要なキー・ワードとして着目されている。この概念は何よりも人間の「生存維持の過程」として重視され、それに必要な栄養と生殖を中心とする「植物的生活」とそのために行動する「動物的生活」が「人間的生活」の基底におかれる。それは、人間存在の非合理性への着目、つまり人々の集団生活をもっぱら人間の本能や衝動を重視して捉える思考方法によって支えられていた。やがてそれは日

本人の「生活」の実在主義的傾向、つまり「生活事実」の歴史や伝統の自覚に導かれ、1930 年代以降の日本文化論に行き着くことが検討される。主として第四章「『生活事実』の再検討と意味変容—ナショナリティ論の転回を手がかりに」で分析された、こうした「生活事実」という基礎概念の新たな読み替えの指摘もまたこれまでの如是閑研究におけるひとつの斬新な問題提起をなしている。

以上のように、本論文が「共同性の探求」という独自な視点を設定して、国家・社会・ナショナリティといった共同性に関連する諸概念を如是閑がどのように読み解こうとしたかについて詳細に検討することを通して、「個」と共同性の再構成に取り組んだ如是閑の思想的営為を丹念に見つめ直し、上述したようないくつかの新しい問題提起をしていることは高く評価できる。

よって、本論文は博士(政治学)(同志社大学)の学位を授与するにふさわしいものであると認められる。

総合試験結果の要旨

２００９年7月２５日

論 文 題 目：　共同性の探求―長谷川如是閑の政治思想―
学位申請者：　織田　健志
審 査 委 員：
　主　査：　法学研究科　　教授　出原　政雄
　副　査：　同志社大学　名誉教授　西田　毅
　副　査：　法学研究科　　教授　富沢　克

要　　旨：

２００９年7月２３日の１３時３０分から１時間半ほどの時間をとって、口頭審査を行なった。時間いっぱい使ってかなり突っ込んだ議論を行なうことができた。審査委員から時にはかなり厳しい質問や意見が出されたが、申請者は終始真摯に応答していた。むろんすべての問題に答えつくせたわけではなく、今後の課題として残された点もあるが、おおむね妥当な応答であると判断でき、論文テーマに関する理解は十分なものと認められる。将来の研究課題の提案なども多く出され、かなり充実した議論ができた。

語学については、論文内容と口頭審査を通じて相当の英語の語学能力を有していると判断できた。

よって、総合試験の結果は合格であると認める。

博 士 学 位 論 文 要 旨

論 文 題 目： 共同性の探求――長谷川如是閑の政治思想――
氏　　名： 織田 健志

要　　旨：

長谷川如是閑（一八七五――一九六九）は、明治・大正・昭和の長きにわたり活躍した近代日本を代表するジャーナリストであり、吉野作造や大山郁夫らと並ぶ大正デモクラシー運動のオピニオン・リーダーとして今日その名が知られている。また、深い学識と幅広い問題関心を多彩な方法で表現した第一級の言論人として、しばしば「文明批評家」とも評される優れた思想家であった。如是閑は、庶民の平凡な日常生活を「生活事実」と呼んで自らの言論活動の根底に据え、そこから遊離した制度や思想に対する鋭利な批判活動を繰り広げた。同時に、非国家的領域としての「社会」の自律化に特徴づけられる第一次大戦後の「社会の発見」という知的傾向を重く受け止め、「制度」としての国家の役割を限定し、「社会」概念の中に「個」と共同性の相関関係を読み込んでいったのである。本論文では、「生活事実」という概念と「社会の発見」の知的傾向を導きの糸として、「個」と共同性の問題を中心に、長谷川如是閑の政治思想について考察した。

本論文でとくに重視したのは、国家主権の相対化と共同性の再構成という「社会の発見」の知的傾向において、国家・社会や「生活事実」といった概念の再検討が重層的に展開されてゆく様相を描き出し、同時に彼の言説の論理構造を辿ることで思考方法への接近を試みることである。本論文の構成は次のとおりである。

第一章「『自我』と『国民主義』のはざま――『文明批評家』長谷川如是閑の誕生」では、如是閑が共同性の重視を説きながらも「個」の自律性にこだわった点を明らかにするため、日露戦争前後から第一次大戦前後の如是閑における「個」の覚醒について検討した。新聞『日本』に入社した如是閑は、「強い自由主義の根底をもった」陸羯南の「国民主義」の影響下で、ジャーナリストとして第一歩を踏み出した。だが他方で、彼は人生の意義に思い悩む「煩悶青年」に共感し、自身も「自我」意識を明確に懐けず、さりとて既成秩序に同調することもできずに「煩悶」を繰り返すことになった。日露戦後の青年層の「個」の覚醒という思想状況を念頭に、エッセイや小説の分析も織り交ぜながら、「国民主義」と「個」の意識のあいだを揺れ動いていた如是閑の内面世界に照明を当て、「文明批評家」としての思想的出発点について解明した。

第二章「『国家の社会化』とその思想史的意味――『現代国家批判』とその周辺」では、如是閑の主著『現代国家批判』（一九二一年）のテクスト読解を通して、彼の国家論について検討する。従来の研究では、西洋思想の影響や鋭利な国家批判の内容を解明することに関心が集中し、如是閑の思想全体における国家論の位置づけや、同時代の思想家の国家構想との比較についてあまり注意が向けられなかった。そこで本章では、「国家」と「社会」を対立的に捉える「二元社会」論、国家至上主義に対するイデオロギー批判、「制度」としての国家の「物神化」批判という、如是閑の国家批判の基底をなす一貫した論理を検討した。その後に国家批判の延長線上に展開された、人々の日常生活＝「生活事実」から国家の存在理由を説いた「国家の社会化」について、民本主義論や多元的国家論など当時の代表的思潮への如是閑の共感や反発もふまえつつ、その思想史的意味を考察した。

第三章「共同性の探求――『社会』概念の形成を中心に」は、そのタイトルが示すとおり、如是閑の主要な思想課題を「個」と共同性をめぐる問いと考える本論文において中心をなす章である。本章では、「社会の発見」という一九二〇年代の思想状況をふまえ、如是閑における「社会」

概念の形成過程について考察する。まず、社会論の代表作である『現代社会批判』『道徳の現実性』（ともに一九二二年）の読解を通して、彼が「個」と共同性の関係をどのように考えていたのかを瞥見し、理論枠組であった社会有機体論について検討する。そのうえで、先行研究で全く省みられなかった「行動の体系としての社会」という如是閑の社会理論を取り上げ、社会有機体論の読み替えを通して、日常生活の中に「個」と共同性の相関関係を読み込もうとする彼の思想的営為について明らかにした。

第四章「『生活事実』の再検討と意味変容――ナショナリティ論の転回を手がかりに」では、ナショナリティ論の転回を明らかにすることで、如是閑の言論活動を根底で支えていた「生活事実」概念の変容について検討した。如是閑によれば、「民族」という言葉は、庶民の「生活事実」から乖離したイデオロギーと考えられた。そして、このような「民族」観念の高唱が、国家権力や国家内部の「階級対立」という現実の隠蔽につながるとして厳しく批判された。こうした「生活事実」を重視する立場から、如是閑は「民族」観念のもつイデオロギー性を暴露し、理念や当為によってナショナリティを規範化することを拒絶したのである。しかし、抽象的価値による「基礎づけ」を一貫して拒否しつづけたがゆえに、如是閑は自らの立論の根拠である「生活事実」を語るとき、連綿とつづく人々の日常生活の「歴史」を介して、ナショナリティの論理を必要とするというディレンマに陥ったのであった。庶民の日常生活の営みという現実から日常生活の歴史へと転換してゆく如是閑による「生活事実」の再検討を明らかにすることで、合理主義的思考への懐疑、形而上学批判、有機体論的秩序観といった国家論や社会論で提示された主要論点が、形を変えながら日本文化論の中に組み込まれてゆく様子を追跡した。

以上の各章の考察を通じて、これまで自明視されてきた「批判」という思考枠組をいったん括弧に入れて、国家・社会・ナショナリティといった共同性をめぐる諸概念を再検討する如是閑の言説の思想史的意味を探り、同時にその論理構造を辿ることで、彼の思考方法の問題への接近を試みた。本論文では、如是閑の思考方法の特徴として、（1）合理主義的思考への懐疑、（2）有機体論的思考、（3）「伝統」の自覚の三点を明らかにした。

先行研究では、如是閑の思想におけるマルクス主義の影響の大きさを論じる傾向が強かった。じっさい、三〇年代初頭に彼はマルクス主義に接近してゆくので、こうした理解を一概に否定することはできないだろう。しかし、これまで如是閑の思想と行動を見る際に暗黙裡に前提としてきた「批判」という枠組からいったん離れて、彼の言説に切り込んでいった結果、本論文では、これまでの研究が等閑に付してきた如是閑の実像を描き出した。合理主義的思考への懐疑・有機体論的思考・「伝統」の自覚――そこから浮かび上がってくるのは、如是閑における「保守主義」的傾向である。

確かに、雑誌『我等』・『批判』時代の如是閑の言論活動は、国家やさまざまな社会制度に対する批判や、意表をついた比喩とレトリックを駆使した巻頭言における文明批評が中心であった。そしてじっさい、批判精神に溢れる言説で「文明批評家」として多くの読者を魅了してやまなかった。しかし、長谷川如是閑の「文明批評家」としての本領は、光彩を放ちつづける「批判」そのものにあるのではなく、むしろそのような「批判」の奥底に通底している〈共同性の探求〉の思想的営為にあったのではなかろうか。

如是閑は庶民の日常生活を重視し、「生活事実」を拠り所にして精力的な言論活動を繰り広げた。にもかかわらず、結局のところ、彼は「生活」の「傍観者」に過ぎなかった。じっさい、「文明批評家」としての華やかな活躍の裏側で、如是閑は自らの評論が所詮は「生活の批評」に過ぎず、「生活そのもの」ではないという思いにつねにさいなまれていた。だが、如是閑が解こうとした「個」と共同性をめぐる問題は、現代に生きるわれわれ自身にとってもきわめて切実な思想課題である。人々の具体的な「生活」に依拠することで理念や当為といった超越的価値をもたずして、現状肯定や生活保守主義に陥らず、新たな秩序を生み出すにはどうしたらよいか。「個」の自律性は前提としつつも、それと人々の「生」を保障して安らぎを与える慣習や文化、その源泉となる共同体とどのように折り合いをつけ

るか。如是閑との「対話」を通じて、われわれはこれらの問題への「解答」ではなく、むしろ問題そのものを突きつけられたのである。

理念や当為による「基礎づけ」を一切拒否して、「生活」という視点から共同性を語ることはじつに困難である。底なしの「相対主義」か、あるいはそのネガである排他的なエゴイズムに陥る危険性がつねにつきまとう。如是閑の「生活事実」にも同様の懸念があることはいうまでもない。にもかかわらず、如是閑は「個」か共同性か、事実か観念か、「作為」か「自然」かという「あれかこれか」の二者択一を乗り越えるべく「生活事実」にこだわりつづけた。そして、こうした隘路を抜け出す一つの方途として、如是閑は「生活事実」の歴史としての「伝統」と向き合うことになったのである。彼の導き出した結論の当否が問題ではない。むしろ、〈共同性の探求〉において如是閑の格闘した、現状肯定に陥らない「生活」に内在する秩序の探求が、容易に解決することを見ない、永続する問いであるという事実をわれわれは深く自覚しなければならないだろう。